

にんじんくらぶ

服を脱ぎ、パンティとシュミーズだけになる。「壁あつき部屋」の設定に私はパニック状態になった。BC級戦犯の実録だったため、作品は米国への配慮でしばらくお

書屋履の私

子 恵 岸

12

蔵入りとなり、かなり後の1956年に封切られた。撮影は「君の名は」の一部か二部のすぐ後だったと思う。真知子熱が高まり、スターと騒がれてもまだ私にはマネージャーも、付き人も、運転手付き車もなかった。「どこで服を脱ぐ?」「赤線地帯の

現場で衆目の中?」「嫌だ」――。覚悟を決め、ロケパスの中で服をかなぐり捨てた。スタッフが驚く中、迷いはなかった。ロケパスを飛び降り、新宿2丁目の大通りをシュミーズ1枚にはだして歩く。とヤジが飛んだ。「真知子さん。体が丸見えだよ。オッパイまで見えてるよ」。本物の娼婦たちがはやし立てた。暑い日なのに肌にさざ波の

つまらぬ役出演に「ノー」

女性だけのプロダクション設立

撮り映画をたらい回しにされることに耐えられなかった。「女だけのプロダクションを作りたい」。先輩だったが年が近い久我美子さんと意気投合した。「でも2人じゃ寂しいわね」と久我さん、「有馬稲子っていう威勢のいい人がいるじゃない」と私。こうして無鉄砲な女優3人は54年4月、「文芸プロダクションにんじんくらぶ」を設

ような悪寒が走り、「私は今、女優になった」と思った。54年のキネマ旬報ベストテンで「七人の侍」(3位)を超えて話題をさらった「女の園」(2位)は学園闘争を描いた作品で私は物おじしないクールな女学生を演じた。この頃、私は「演技者にも作品を選ぶ自由が欲しい」としみじみ思っていた。睡眠時間は3時間未満。訳もなく早



シュミーズ姿で出演した「壁あつき部屋」

品作となり、令夫人から神戸の日雇い労働者に落ちぶれるまでを演じた私はそこで最優秀女優主演賞を頂いた。授与式前夜、受賞するとは夢にも思っていなかった私は大きなベッドにつられた蚊帳をくぐり抜け、暮れなずむ波打ち際の庭に出た。レトロな

思い出した。「シンガポールの大きな太陽は沈む時、海も人も朱に染めてゆく」。その首飾りをお土産にくれた叔父の言葉が浮かび、芝生の上の大の字になって横たわった。私の体も、私の未来も、朱に染まってゆくのを感じた。最優秀女優主演賞のトロフィーは大きな金色の地球儀の上にライオンが前脚を乗せて吠えているという恥ずかしいほど派手なものだった。次回作が待っていたら